

児童生徒理解に基づくコミュニケーションサポートの充実に関する研究

— 「つなサポ」における児童生徒への支援の在り方 —

子ども教育相談係
長期研修員 源川 直哉 藤林 明子

《研究の概要》

本研究は、令和6年4月にスタートした「心と学びのサポートセンター『つなぐん』」、児童生徒の新たな学びの場として3Dメタバース上で同年6月から始めた「つなぐんオンラインサポート（通称：つなサポ）」における実践を通して、相談機関における児童生徒理解の具体的な方法とその大切さを明らかにした。

また、一年次は「コミュニケーションサポート」の充実を目指し、3Dメタバース上のエビデンスや他機関・学校等との情報共有を基にした児童生徒理解と一人一人に応じた支援を行った。

キーワード 【教育相談 児童生徒理解 「つなぐん」 「つなサポ」 3Dメタバース】

群馬県総合教育センター

分類記号：FO 9-01 令和6年度 285集

本報告書に掲載されている商品又はサービスなどの名称は、各社の商標又は登録商標です。

<各社の商標又は登録商標>

eboard は、NPO 法人 eboard の商標です。

Virbela（日本名：GAIA TOWN）は、EXP WORLD TECHNOLOGIES, LLC の商標です。

桃太郎電鉄は、株式会社コナミデジタルエンタテインメントの商標です。

なお、本文中には™マーク、®マークは明記していません。

I 主題設定の理由

文部科学省「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、学校を長期欠席している児童生徒の数は全国で49万人を超えて、11年連続で増加し、過去最多となつた。その背景には、学校や家庭環境の変化、子供たちの心の問題、社会の多様化など、様々な要因が考えられている。欠席の要因や背景が深刻化・多様化している中、学校や一部の機関だけで児童生徒や家庭に応じた対応や切れ目のない支援を続けていくことは難しくなつてきている。「生徒指導提要」においても、生徒指導の諸課題を解決するためには、校内連携型支援チームによる組織的対応や、校外の関係機関等との連携・協働に基づくネットワーク型支援チームによる組織的対応が必要であることが示されている。これまででも連携や情報共有は教育現場において必要とされてきたが、学校以外の学びの場が新たに広がっている今、それぞれの場所における児童生徒理解や支援を充実させていくために、組織的な対応がより重要である。

文部科学省の施策においては、行政だけでなく、学校、家庭、地域社会、NPO、フリースクールの関係者等が相互に連携をしながら、一人一人の児童生徒に必要な支援を行うことを目指している。「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」では、大きく三つの方向性が示され、より一層の取組の推進が望まれている。本県には、学校以外の学びの場として、それぞれの市町村教育委員会が設置する教育支援センターが40か所あり、学習や体験活動、教育相談が行われている。また、民間の運営するフリースクールでもそれぞれの独自性をもちながら、一人一人の状況に応じた学習活動や体験活動、人と関わる機会や安心して過ごせる場所の提供等を通して、多様な個性を大切にしながら、児童生徒の社会的自立に向けてのサポートが行われている。一方で、児童生徒が家から出られない、保護者の送迎が難しい、近隣に教育支援センターやフリースクールがないので通えない等、新たな学びの場につながることが難しい児童生徒がいることも課題となっている。

当センターの子ども教育相談係では、そのような児童生徒を新たな学びの場につなげるために、COCOLOプランの目指す姿1「不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整えます。」の具体策として、3Dメタバース上に「つなぐんオンラインサポート（以下「つなサポ」）」を作り、学校以外の学びの場としての体制づくりを進めてきた。そして「つなサポ」が児童生徒の居場所となり、児童生徒が自分のペースで学んだり、活動したりできる環境を整えた。また、目指す姿2「心の小さなSOSを見逃さず、『チーム学校』で支援します。」の取組として、ICTの利活用によって児童生徒の小さな声が可視化され、様々な機関が連携し、児童生徒や保護者が必要な時に支援を行える体制を構築するために、「心と学びのサポートセンター『つなぐん』」として相談窓口の一元化を図り、相談と支援を行っている。また、COCOLOプランの実効性を高める取組の二つ目に「エビデンスに基づき、ケースに応じた効果的な支援方法の確立」がある。具体的には、ICTを活用して得たデータを用いて、心の小さなSOSを見付けるといった早期発見や効果的な対応方法の事例を蓄積することで、専門的知見とエビデンスに基づき、ケースに応じた支援の在り方を確立することが求められている。

長期に欠席している児童生徒への3Dメタバースを活用した教育実践の先行事例として、愛媛県の「メタサポキャンパス」の取組が挙げられる。愛媛県の取組も参考に、これまでの相談支援の在り方の見直し、学校以外の学びの場づくり、長期間学校を休んでいる児童生徒への3Dメタバース上での支援方法について、探索的に研究を行うこととした。

本研究は三年計画の一年次と位置づけ、「児童生徒理解に基づくコミュニケーションサポートの充実に関する研究」という主題を掲げた。実社会でも3Dメタバース上であっても、児童生徒を支援していくに当たり、まず児童生徒理解が大切である。「つなサポ」ではアバター（3Dメタバース上の自分の分身）の姿による対面であるため、人と関わることが苦手な児童生徒にとってコミュニケーションのハードルが下がるというメリットがある反面、相手の表情が分からず、その思いを読み取ることが対面のコミュニケーションより困難である。そこで、児童生徒理解を深め、自分らしさやその子がもっている思いや願いを引き出し、その思いや願いに寄り添った支援の在り方を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

「つなサポ」の実践において、人と関わりながら自分らしいコミュニケーションの方法で思いを表出できる児童生徒の姿を引き出すために、具体的なコミュニケーションサポートの在り方について、実践を通して明らかにする。

III 研究の内容

1 研究構想図



2 「心と学びのサポートセンター『つなぐん』」について

(1) 「子ども教育相談室」の相談体制と相談窓口の一元化

子ども教育相談室では、0歳から18歳までの子供に関わる教育相談、発達相談、子育て相談や保育相談を、電話、来所や訪問相談によって行ってきた。そして、相談者からの相談に対して助言したり、相談が必要とする機関を紹介したりした。また、本県では、昨年度までは、群馬県総合教育センター（以下、本センター）以外でもメールやSNSでの相談を行っていた。高校教育課は中高生を対象にSNSや高校生を対象にした相談を、県義務教育課は小中学生に関わる相談、ぐんまMANABIBAネットワークの運営と教育支援センターやフリースクール等と学校とをつなぐ活動を行うなど、相談のできる場をそれぞれに設けていた。こうした相談窓口を令和6年4月に本センターの「子ども教育相談室」に集約し、6月には、新たに「つなぐん」オンラインサポート（通称「つなサポ」）

を立ち上げ、ワンストップ相談窓口「心と学びのサポートセンター『つなぐん』」として一元化した（図1）。一元化したことによる相談者にとってのメリットは、親も子もそれぞれに悩みを抱えている中で、相談したい人が「いつでも」「どこからでも」「いろいろな方法で」によって、「つなぐん」に相談できるようになり、電話相談、メール相談、来所相談、訪問相談、オンライン相談の中から、相談したい場を選択して相談することができるようになったということである。

(2) 相談から支援へ

今年度「つなぐん」に移行したことで、令和5年度までの相談と比べ、相談の流れに変化が見られた。それは、相談窓口の一元化により、それぞれの相談窓口で対応した情報を共有することができたことである。また、その情報を迅速に共有することもできるようになり、相談者が知り得た情報を基に、相談者にどのようなアセスメントやガイダンスをしたらよいかケース会議をもったり、それぞれの相談に寄り添った支援になるよう助言したり、必要に応じて相談者の意思を確かめながら、「つなぐん」と学校が連携したりすることができるようになった。さらに、相談者の必要に応じて、フリースクール等の紹介、「つなサポ」への接続といった情報提供も行いながら、相談者が一步踏み出せるような「同時・並行的な相談と支援を行う」ことができるようになった。

(3) 「つなぐん」の相談者対応

相談とは、問題の解決を目的とした対話である。そのため、どのような声のトーン、口調、速さ、間の取り方がよいかなどを意識して相談対応を行うことが大切である。相談者の話を聞くうえで、言葉を繰り返して思いを確認したり、伝えたいことを明らかにしたり、短い言葉で端的に表現したり、確認のために質問を挟んだりしながらカウンセリングを進めていく。電話相談では、カウンセリングを進めていく上で、基本として、穏やかに、落ち着いて、声のトーンはやや低めで意識的に相手より少しうつくりといった聴覚情報になるように行いながら、相談者の「話」を整理しながらアセスメントを行う。

(4) 「つなぐん」の電話相談から見える、児童生徒や保護者に求められる支援とは

今年度、「つなぐん」に寄せられた電話相談の主訴別割合を見ると、「養育」が25%と最も多く、次いで「友人関係」と「学校に行けない、行かない」という相談が13%となっている（次ページ図2）。

グラフでは主訴別に分類されているが、実際の相談では複数の課題を複合的に抱えているケースも少なくない。例えば、主訴が「養育」の相談であっても、「保護者から友人関係のトラブルが原因で学校



図1 「つなぐん」の概要

に行きにくくなっていることが多いから」、「わが子とどのように関わっていけばよいか」という相談もある。そこで、友人関係の解決のために、どのように子供に声を掛けたらよいかということと、学校の教職員との連携の進め方などについて相談を進めていくこととなる。

「生徒指導提要」（令和4年12月）には、「担任一人ではできないことも、他の教職員や多職種の専門家、関係機関がチームを組み、アセスメントに基づいて役割分担することで、指導・援助の幅や可能性が飛躍的に広がる事や、学校だけでは対応しきれない部分をカバーしたり、よりよい解決の方向性を見出したりするためには、多職種の専門家と連携が不可欠である。」とある。

現在、学校においては、チームによる組織的対応が行われている。「つなぐん」に寄せられる相談の中には、児童生徒が学校や家庭生活の中で、困った状況や難しい場面に出会っていることが語られる。教職員も保護者もそのような児童生徒を支えようとするが、うまくいかなかったり、気持ちが分からなかったりという状況も見られる。心因性の体の不調や高い不安感・緊張感を抱えている児童・生徒に対する児童生徒理解を進めていく上で、これまで「つなぐん」の相談室で行ってきた相談対応の「相談者の気持ちを受け止める姿勢」や「共感的な理解」が大変重要であると考える。

また、学校で見せる児童生徒の姿と家庭内で見せる児童生徒の姿が異なっているケースや児童生徒の姿の捉え方や関わり方が学校と家庭で一致していないケースから、児童生徒の悩みや課題が一層大きくなっているケースも見られる。児童生徒が見せる一面の姿からの理解を超えて、複数の視点から児童生徒を理解していくことも、複数の課題を複合的に抱えている児童生徒への支援をする際に必要になってくると考える。

「つなサポ」に入室してくる児童生徒に対しても、「つなぐん」の相談者の背景を踏まえて、これまで大切にしてきた相談対応を活かしていくことが望まれていると考える。

3 「つなぐんオンラインサポート（つなサポ）」について

本センターでは、令和6年6月から「つなサポ」の運用を開始した。この体制が整ったことで相談から支援へのつながりが円滑になり、新たな学びのカタチが実現した。

(1) 支援の目的

様々な理由で長期欠席をしている児童生徒に対して、3Dメタバース上にアバターで参加しながら学習や相談の機会を提供することにより、コミュニケーション力や自ら学ぶ力を育成する。

(2) 使用アプリケーションソフト

株式会社ガイアタウンが提供している3Dメタバース「GAIATOWN（以下、「ガイアタウン」）」を使用している。「ガイアタウン」のメタバース空間は、より現実に近い空間や動作を感じられる仕様となっており、場所を選ばずに時間と空間を共有することができる。「つなサポ」にアバターで参加することは、年齢や性別、容姿、学力、友人関係、過去のトラウマなどに対する、他者からの偏見がなく、「心のハードルの低い」安全・安心な居場所づくりを目指すことができる。

(3) 対象者

- ・県内の小・中・高・特・中等・義務教育学校に在籍し、原則として30日以上学校に通学できていない状態が続く児童生徒。
- ・校内での会議を実施し、在籍校の校長が「つなサポ」での支援が適当と判断した児童生徒。
- ・本人及び保護者が入室を希望し、原則、自宅にアプリを起動できるパソコン端末、通信機器が整っている環境にある児童生徒。

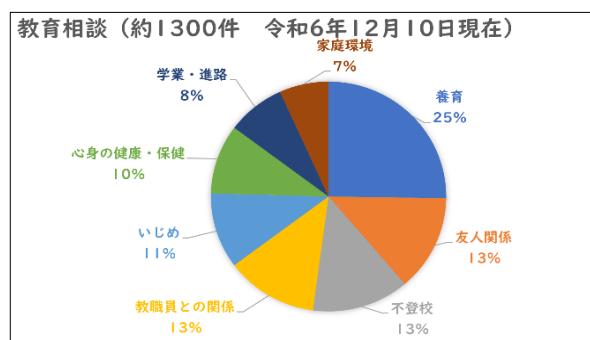


図2 電話相談の主訴別割合

(4) 「つなサポ」運用計画

本年度の「つなサポ」運用計画は、以下の表1のとおりである。この表のように試行錯誤を繰り返し、児童生徒への支援を充実させていった。

表1 「つなサポ」運用計画の概要

月	内容
4・5	<ul style="list-style-type: none"> ・開設に向けた諸準備 ・愛媛県「メタサポキャンパス」視察 ・1学期支援内容の検討 ・県内の学校、関係機関、保護者、児童生徒への周知（「つなサポ」専用ホームページ開設・各種メディア取材・市町村教育委員会や学校関係機関等の視察、校内研修支援）※年間を通して実施 ・ICT教材「eboard」契約
6・7	<ul style="list-style-type: none"> ・運用開始、1学期開始（6月8日） ・基本時間割の運用 ・ICT教材「eboard」活用 ・児童生徒在籍校との連携 ・毎週水曜日、有資格者の「つなサポ」カウンセラーの相談開始 ・ロングイベントタイム「つなサポ七夕祭り」「つなサポ夏祭り」の実施
8	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期開始 ・1学期運用の検証 ・2学期支援内容の検討 ・「つなサポ」フロア拡充に伴う新「つなサポ」ルームの開設準備 ・児童生徒在籍校との連携
9～11	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒在籍校との連携 ・県有施設によるワークショップ実施（キーテクノロジーぐんま天文台・群馬県立歴史博物館） ・愛媛県「メタサポキャンパス」と交流イベント（○×クイズ）実施 ・「桃太郎電鉄（教育版）」契約・活用 ・ロングイベントタイム「つなサポウォークラリー」「つなサポハロウィンイベント」の実施
12	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒在籍校との連携 ・ロングイベントタイム「つなサポクリスマス会」の実施 ・2学期運用の検証 ・児童生徒及び保護者へのアンケートの実施、児童生徒在籍校へのアンケートの実施 ・3学期支援内容の検討
1～3	<ul style="list-style-type: none"> ・3学期開始 ・児童生徒在籍校との連携 ・大学生サポーター参加 ・県有施設によるワークショップ実施（キーテクノロジーぐんま天文台・群馬県立歴史博物館） ・愛媛県「メタサポキャンパス」と交流イベント（ウォークラリー）実施 ・令和7年度「つなサポ」募集案内チラシ配布（市町村教育委員会、県立学校） ・保護者対象の相談会の実施 <ul style="list-style-type: none"> ①児童生徒のアバターを使ったメタバース相談 ②参集型保護者の会「あったかスマイル相談会」 ・3学期運用の検証 ・次年度年間運用計画の検討

(5) 「つなサポ」の体制

① スタッフ同士の連携

○教育相談的な関わりを重視

「つなサポ」スタッフで支援方針を共通理解し、児童生徒の支援をしている。その中で、教育相談的な関わりを重視している。具体的には、Well-being（あなたも、私も自分らしく）、Agency（自分の力で）の二点を柱とし、手をかけすぎない、急がせないことを心がけ、児童生徒の主体性や自己決定を信じて待つことを大切にしながら、自分の意思を示したり、主体性を發揮したりできる場づくりを工夫している。臨床心理士や教育相談専門の大学教授から助言をいただき、関わり方や場づくりにも活かしている。

○スタッフマニュアルの作成

スタッフが同一歩調で支援にあたれるように「スタッフマニュアル」を作成した。「つなサポ内での対応」「学校との初回電話対応」「学校・保護者・児童生徒との面談対応」「イベントタイムアイデア集」がまとめられている。

○ミーティングやケース会議の実施

スタッフは、毎日活動前後にミーティングを実施し、児童生徒の情報共有、その日に行うスタートタイムとイベントタイムの担当や内容の確認、その日の振り返りを行っている。また「週1ミーティング」を実施し、1週間の予定の確認、ケース会議において支援方針や支援内容の協議を行っている。

② 三つのサポート

○学習サポート

自分のペースで自主学習ができるよう、ICT教材「eboard」、タイピング練習アプリ、「桃太郎電鉄（教育版）」、「NHK for School」、県有施設の動画、プログラミング教材「Scratch」を活用した。また、興味関心が深まるよう、県有施設等と連携したワークショップを実施した（図3）。



図3 ワークショップの様子

○相談サポート

困りごとが相談できるよう、個別での相談に対応できる体制を整備し、進路相談や個人的な悩みの相談が気軽にできるよう、有資格者のカウンセラーによる相談時間を設けた。

○コミュニケーションサポート

思いを表現できるよう、音声やチャット、エモート（ジャスチャー）、ダンス、付箋等のツールを活用した。また、児童生徒同士の交流がもてるよう、イベントや集団活動の機会を設けた。

③ 「つなサポ」の運営

○時間割や活動の工夫

「つなサポ」の時間割は、表2のとおりである。「つなサポ」では日々の時間割や活動を工夫している。毎日、午前・午後の2部制を採っているが、これは午前だけ、午後だけ参加する児童生徒に毎日の達成感をもってもらえるようにするためである。

表2 「つなサポ」の時間割（2学期最終週）

日付 曜日	12月16日	12月17日	12月18日	12月19日	12月20日
時間	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
フリータイム お気に入りの部屋で自由に過ごしましょう！					
10:00～					
10:30～	ふれあいルームでスタッフの話を聞いたり、今日の予定を確認したりしてね		スタートタイム		イベントタイム
11:00～	チャレンジタイム	学びルームで興味のあることを勉強しよう		つなサポ	
11:30～	イベントタイム	スタッフと一緒に、みんなで楽しいイベントに参加しよう		クリスマス会	
12:00～	お昼休み				
13:00～	フリータイム お気に入りの部屋で自由に過ごしましょう！				
13:30～	スタートタイム				
14:00～	チャレンジタイム 学びルームで興味のあることを勉強しよう	アドバイス タイム	チャレンジタイム チャレンジタイム アドバイス タイム	アドバイス タイム	フリータイム
14:30～	イベントタイム スタッフと一緒に、みんなで楽しいイベントに参加しよう	スタッフに相談してね	イベントタイム クリスマス会の準備をしよう	イベントタイム スタッフと一緒に、みんなで楽しいイベントに参加しよう	お気に入りの部屋で自由に過ごしましょう！

- ・フリータイム

一人一人が、他のアバターに挨拶をしたり、タイピング練習をしたり、ダンスを踊ったり、掲示物を見て回ったりして思い思いに時間を過ごしている。

- ・スタートタイム

集会用のふれあいルームに集まり、他の児童生徒やスタッフと挨拶をしたり、簡単なエクササイズをしたり、スタッフのスピーチを聞いたりする。その後、その日の予定を確認している。

- ・チャレンジタイム

自分のペースで自主学習ができるよう、ICT教材「eboard」、タイピング練習アプリ、「桃太郎電鉄（教育版）」、「NHK for School」、県有施設の動画、プログラミング教材「Scratch」等を活用し、個別学習を進めたり、課題に挑戦したりしている。

- ・イベントタイム

みんなでゲームやスポーツ、鬼ごっこ、季節のイベントなどを行って、他の児童生徒やスタッフと関わり、コミュニケーションを図っている。

- ・アドバイスタイム

毎週水曜日は、有資格者の「つなサポ」カウンセラー やスタッフに気軽に相談やおしゃべりができる「アドバイスタイム」を設けている。

- ・ロングイベントタイム

季節の行事に合わせて、通常のイベントタイムより時間や内容を充実させた特別イベントを実施している。児童生徒がアイデアを出し合って企画を考えたり、会場準備を手伝ったりできるように、支援を工夫している（図4）。

- 部屋のレイアウトの工夫

「つなサポ」開設当初は、大きな部屋が1部屋、小さな部屋が12部屋の構成であった。その後、入室児童生徒数が多くなり、1学期が終わった段階でガイアリンクとの契約内容を見直した。そこで、大きな部屋が2部屋、小さな部屋が18部屋の新しい「つなサポ」ルームを一から作り直すこととなった。その際、臨床心理士や教育相談専門の大学教授から助言をいただきながら、児童生徒にとって安全・安心な居場所となり、多くの学びがあるように部屋のレイアウトや掲示物を作成した。また、児童生徒のマイブームを紹介し合う部屋や自分の思いや考えを付箋で伝え合えるような部屋も用意し、交流できる場を設けた。

④ 学校・保護者・関係機関とのネットワークづくり

- 「つなサポ」webページ開設

本センターでは、「つなサポ」専用webページをバナーでリンクして開設した。「つなサポ」の概要や説明動画を見ることができる。また、児童生徒・保護者・学校関係者向けの各種説明資料も掲載している。このように多くの方々に周知し、学校・保護者・関係機関とのネットワークづくりに努めている。

- 各種説明資料の作成

児童生徒・保護者・学校関係者向けにそれぞれ各種説明資料を作成した。児童生徒用の説明資料では、「つなサポ」での活動内容や部屋の紹介等をまとめている。保護者・学校関係者向けの説明資料では、「つなサポ」の概要や申込みから入室までの流れ等をまとめている。いずれの資料も、Q&Aの内容を取り入れることで安心して「つなサポ」に入室できるよう努めている。



図4 クリスマス会の様子

IV 「つなサポ」における実践

1 「共感的な児童生徒理解」とエビデンスに基づく支援の在り方

(1) 基本的な考え方

① 「共感的な児童生徒理解」とは

「生徒指導提要」では、共感的理解について「教育相談では、児童生徒の声を、受容・傾聴し、相手の立場に寄り添って理解しようとする共感的理解が重要」とあり、教育相談的な視点で児童生徒を理解することが重要である。本研究では、共感的な児童生徒理解を基に様々な支援を行う。「共感的な児童生徒理解」とは、児童生徒一人一人の心情に寄り添い、その言葉や行動の背景にある感情や考えを理解しようとすることや、単に事実を把握するだけでなく、相手の感情や立場に寄り添い、深く理解しようとすることだと捉える。

② 「エビデンスに基づく支援」とは

本研究では、様々なエビデンスに基づいて児童生徒理解を行う。ここでの「エビデンス」とは、児童生徒理解のための資料を指し、「つなサポ」では、「入室前情報」、「行動記録」、「アバターの言動記録」の三つを基にしている。

一つ目の入室前情報とは、学校と児童生徒から事前に収集した該当児童生徒の情報のことで、具体的には、児童生徒本人から、好きなこと、得意なことや苦手なこと、「つなサポ」でやってみたいことを情報として収集している（図5）。また、本人の性格や特性、長期欠席の経緯、当年度の欠席及び現在の状況についての情報を学校から収集している（図6）。

様式2 （本人）→（学校）→（群馬県総合教育センター）	
自己紹介カード	
ふりがな 名前	
アバターネーム	
学年・生年月日	年 年 年 月 日 生
好きな（ ）	
好きな（ ）	
好きな（ ）	
得意なこと・苦手なこと	最近気になっていること
「つなサポ」でやってみたいこと・やってほしいこと	
<small>※このカードに記入した内容は、スタッフが本人を理解するために使用します。 「つなサポ」内の掲示などに使用することはできません。</small>	

図5 自己紹介カード

様式3 （学校）→（群馬県総合教育センター）	
個人票	
記入日 令和 年 月 日	
児童生徒情報	
ふりがな 氏名	
性別	<small>統計上必要となるため、戸籍上の性別をご記入ください。</small>
生年月日（年齢）	平成 年 月 日 生（歳）
本人について (性格や日頃の様子など)	
今年度の欠席日数の合計	日
不登校になった経緯 (時期や原因と思われる出来事)	
現在の状況	
配慮すべきこと	
学校名	
学級担任氏名 関わりやすい教職員（いれば）	（ 年 組担任）

図6 個人票

二つ目の行動記録とは、アバターの様子を一人一人見取り、スタッフが毎日記録している情報のこととで、いつ、どこで、何を、どのようにしていたのかを具体的に文字化して記録している。

三つ目のアバターの言動記録とは、行動記録とは別に、「つなサポ」内のチャットの内容や付箋の内容、アバターの行動の様子を画像記録として残しているものを指す。

本研究では、「エビデンスに基づく支援」を、これらのエビデンスから児童生徒の思いを読み取り、児童生徒理解をし、支援を行うことだと捉える。

③ 「つながりづくり」・「関わりづくり」・「居場所づくり」とは

本研究における「つながりづくり」とは、主にスタッフと児童生徒との信頼関係の構築を目的とした

支援を指す。「関わりづくり」とは、児童生徒同士の人間関係の構築を目的とした支援を指す。「居場所づくり」とは、一人一人の自己存在感を高めることを目的とした支援を指す。これら三つのコミュニケーションサポートを通して、「つなサポ」の中で「私はここにいてよいのだ」という思いをもてるところで、一人一人にとって「つなサポ」が居場所の一つとなっていくと考えた。

(2) 実践の概要

① 入室前情報に基づく支援

ア 入室前情報から分かったこと

「つなサポ」に入室してくる児童生徒の不安感を和らげたり、個別の支援に活かしたりするために、児童生徒の「苦手なこと」に着目し、データ分析を行った。入室前情報の「苦手なこと」の項目をテキストマイニングし、頻度別で表した（図7）。「話す・人前・発表・スピーチ・プレゼン」というワードが多く児童生徒の回答に見られたことから「人前で発表すること」に対して苦手を感じている児童生徒が多いことが分かった。

また「会う・友達・人混み・コミュニケーション」というワードから「他者と関わること」に対して苦手を感じている児童生徒が多いことが分かった。

さらに、情報の中には、場面緘默・対人恐怖症などコミュニケーションに対する課題に関する内容の記述がある児童生徒が全体の8割を超えていた。

以上のことから、「『つなサポ』に参加している児童生徒の多くがコミュニケーションに課題や不安を抱えている」ということが分かった。

イ 「つながりづくり」を目指したコミュニケーションサポート

「つなサポ」に入室してくる児童生徒一人一人が安心して「つなサポ」内で過ごせるために、日常的にスタッフによるコミュニケーションサポートを全ての児童生徒に行った。

- 入室時にスタッフが児童生徒一人一人に声を掛けることで、スタッフとのコミュニケーションの場を設けた（図8）。その際、児童生徒が自分で応答手段を選択できるように、日頃からそれぞれの児童生徒のペースに合わせて、どのような表現でも受容する姿勢を示した。
- 児童生徒がどのようなアバターの姿でも、ありのままの姿を受け入れ、それをその子のよさとして認める姿勢を示した。
- ジェスチャーやダンスといった非言語によるコミュニケーションも児童生徒の思いの表出として大事に受け止め、非言語のみでの関わりもコミュニケーションの一つとして大切にする姿勢を示した。

② 児童生徒の表出した思いに基づく支援

ア 行動分析から読み取れる児童生徒の思い

「つなサポ」に入室してくる全ての児童生徒に対して、コミュニケーションサポートを日常的に繰り返し実践したことで、その後の児童生徒の行動にどのような変化が見られるか行動分析を試みた。

児童生徒の思いが顕著に表れるイベントタイムの参加割合を円グラフに表し、分析した（次ページ図9左）。その結果、「毎日・またはほとんど参加している」児童生徒の割合が過半数を超えてい

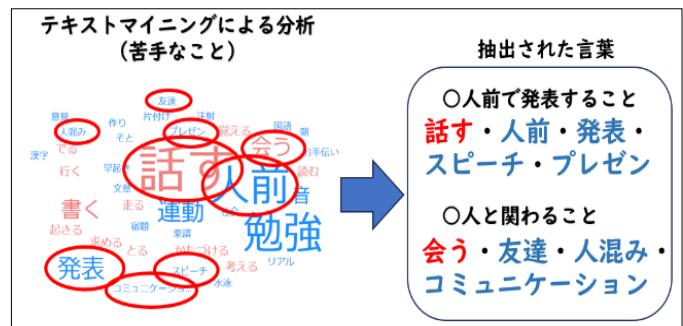


図7 入室前情報の分析 (11/1 現在 44名)



図8 入室時の関わり

とが分かった。さらに、「つなサポ」の一日の流れとして、イベントタイムが午前・午後ともそれぞれの時間の最後の活動に位置付けられているにもかかわらず、半数以上の児童生徒が参加していることから、人と関わる時間を楽しみにしているということを読み取ることができた（図9右）。

また、「『自分の好きなことができるフリータイム』と『人との関わりのあるイベントタイム』のどちらが好きか」を尋ねたところ、質問に答えた児童生徒全員がイベントタイムと答えた。スタッフが児童生徒に「やってみたいこと」を尋ねると、「友達と触れ合いたい」と答えた。

以上のことから、「『つなサポ』の中では、他者との関わりを楽しんだり、他者との関わりを求めていたりしている児童生徒が多い」ということが分かった。

イ 「関わりづくり」を目指したコミュニケーションサポート

「つなサポ」に入室している児童生徒の行動分析から、実社会では「人前で話すこと」や「人と関わること」が苦手だという傾向のある児童生徒たちが、「つなサポ」では、「人と関わりたい」という思いが高まっているのではないかというエビデンス結果が得られた。児童生徒同士のやりとりを生み出すために、「関わりづくり」を目指したコミュニケーションサポートを実践した。

- スタートタイムでの工夫として、二人組での活動を行った。普段のスタートタイムでは、スタッフ対児童生徒一人一人もしくは児童生徒全員という関わり方で活動を行っていたが、この活動では児童生徒を二人組で分け、エモート機能やダンス機能を用いて、同じ動きを瞬時に真似て楽しめるようにした。これにより児童生徒間での1対1のコミュニケーションが生まれ、関わりを深めることができた。また、他者への興味関心を広げることを目的として、「みんなはどっち？」という活動を実施した。この活動は、食べ物や季節など日常生活に関することに対して、「どっちが好き」と二択で答えを選択するというものである。一緒に活動に参加している児童生徒が互いの好きなものを知ることで、児童生徒一人一人が「自分と同じだ」「自分と違う」という新たな気付きを得ることができた。意図的に他者を意識させることで、児童生徒間の関わりを深めることができた。

- イベントタイムの工夫として、七夕やハロウィンなど季節に合ったイベントを通して、参加者が一体感を感じられるような活動を実施した。アバターは服装が自由に変えられるという利点を活かし、スタッフと参加者が同じテーマで、それぞれ思い思いに衣装や姿を変え、イベントタイムに参加した。ファッションショーや記念写真撮影などを楽しむことで、仲間意識や連帯感を感じることができたのではないかと考える（図10）。また、児童生徒同士が協力できる活動も意図的に設定した。スタッフがあらかじめ「つなサポ」ルームのそれぞれの部屋に1文字ずつ付箋で文字を隠し、参加者が文字を探すイベントを行った。全ての文字が見付けられたところで、集めた文字を並べ替えて、協力して文章を完成させた（図11）。参加者が協力して一つのゴールに向かうという協同的な体験から、児童生徒は喜びや達成感を感じて、感情を共有する経験ができたと考える。



図10 ハロウィンイベント記念写真

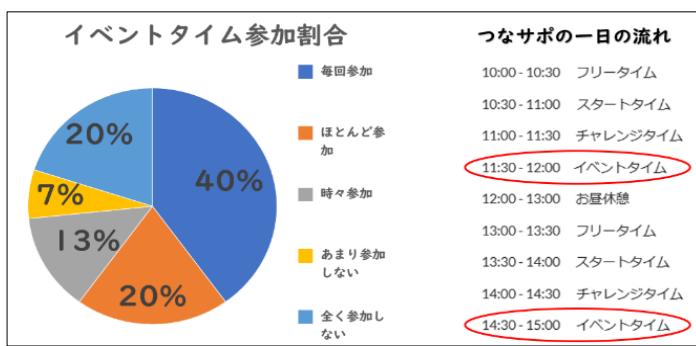


図9 児童生徒の行動分析と「つなサポ」の一日の流れ

図11 意図的な協力場面の設定

○ 場の設定の工夫として、おしゃべり会の場を設けた。これまで、児童生徒同士での関わりがジェスチャーやダンスを用いた非言語コミュニケーションを中心に行われていた。そこで、児童生徒がチャットを用いて、文字による会話を行えるように、スタッフが意図的に話合いの場を設け、共通のテーマでおしゃべり会を行った。最初はスタッフがテーマを発信していたが、その後、テーマを発信する児童生徒も現れた。また部屋の設定の工夫として、趣味や特技を紹介できる機会を設けた。例えば、ある児童生徒が作った料理を紹介するスペースとして、作った料理の写真を掲示した（図12）。その際、それらの写真を見た他の児童生徒たちが感想などのリアクションや付箋機能を用いてその場に残すことで、認め合いの場とることができた。付箋のコメントを通じて、児童生徒間の関わりが深まった。

③ 表出された行動に基づく支援

ア 児童生徒の行動分析や行動の見取りから分かったこと

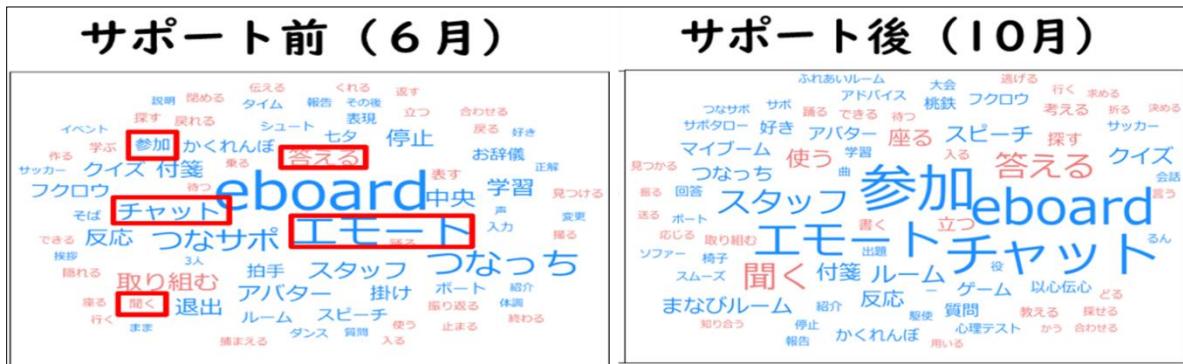


図 13 行動記録の記述内容の比較

「関わりづくり」を目指したコミュニケーションサポートを実践したことで、児童生徒間の関わり方にどのような変化が見られるか行動分析を試みた。抽出児童生徒3名のサポートを行う前(6月)と後(10月)の行動記録の記述内容をそれぞれテキストマイニングし、頻度別のワードクラウドで表すことで、比較した（図13）。「参加・答える・チャット・エモート・聞く」というワードに着目して比較すると、どのワードもサポートを行う前より後の方が表示された文字の大きさが大きくなっていたことから、これらのワードの出現頻度が上がっていることが分かった。これらのワードは人との関わりがあった時にのみ記述される内容であることから、サポートを通して「他者との関わりが増えた」ということが言える。また、積極的に質問する児童生徒の姿や自発的に集まる児童生徒の姿が多く見られるようになった（図14）。図14に映っているアバターは全て児童生徒のアバターで、スタッフが場を設けたわけではなく、関わりたいという思いをもった児童生徒が自然と集まっていた様子である。

以上のことから、「日常的に児童生徒同士のコミュニケーションの場面が増えた。自発的に他者と関わろうとする児童生徒の姿が見られるようになった」ということが分かった。

イ 「居場所づくり」を目指したコミュニケーションサポート

「つなサポ」に入室している児童生徒の行動の変容から、「つなサポ」の中で、「自発的に行動したい」「もっと人と関わりたい」という思いが高まっているのではないかというエビデンス結果が得られ



図 12 趣味や特技を紹介できる機会

サポート前 (6月)

サポート後 (10月)

ふれあいルーム 大会 逃げる 行く 求める
つなサボ サボ 踊る できる 待つ 考える 折る 決める
サポート 好き アバター 座る スピーチ 探す サッカー
マイブーム 使う 学習 入る 答える クイズ
見つかる つなっちは 曲 会話
教える 回答 スタッフ 参加 eboard
見る ポート 曲書く 立つ クイズ
送る 応じる 取り組む 工モート
応じる ソフナー リーム 参加
椅子 まなびルーム
スムーズ 聞く
まなびルーム
知り合う
停止 告白
報告
かくれんぼ
用いの



図 14 自発的に集まる児童生徒

た。そこで、次に「居場所づくり」を目指したコミュニケーションサポートを実践した。

具体的な取組として、児童生徒と共に創り出すイベントを実施した。実施に向けて、児童生徒の意見や思いをおしゃべり会にて吸い上げ、どうやったらその思いを形にできるかスタッフで試行錯誤し、児童生徒の思いに寄り添ったイベントになるように工夫した。その際、会場の飾りつけなどイベントに向けて役割を設定し、準備を分担して進めた。その結果、児童生徒がやりがいと喜びを感じ、イベントに主体的に参加している様子がチャットや行動から見て取れた。

(3) 実践の結果と考察

① データから読み取れること

「つなサポ」への登録者数の推移を見ると、「つなサポ」がスタートした6月の登録者15人から、12月には72人と増え続け、毎月およそ11人の児童生徒が新たに登録していることが分かる（図15）。

次に、「つなサポ」の一日の平均入室実人数の推移を見ると、6月の5.2人から、12月は19.2人と大きく増えている（図16）。月ごとの増加数は、7月から8・9月が一番少なく1.3人、10月から11月が5.6人と一番多いことから、月による増え方の差が大きくなっている。

図15と図16から登録者数の増加に伴い、入室者数も増えてきていることが分かり、月々の登録者数のおおよそ4人に一人の割合で児童生徒が毎日入室できていることが読み取れる。

1学期から入室している「つなサポ」参加児童生徒の出席率の推移のグラフからは

「つなサポ」参加児童生徒の詳しい実態が見えてきた（図17）。棒グラフは月別の出席率を4色に色分けして表している。16人中12人とほとんどの参加者が4色のグラフ

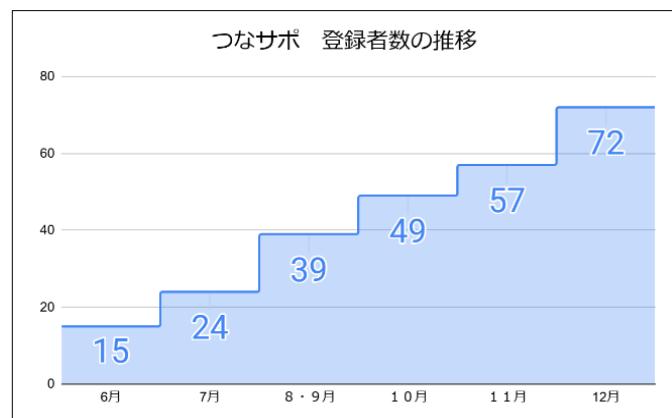


図15 登録者数の推移

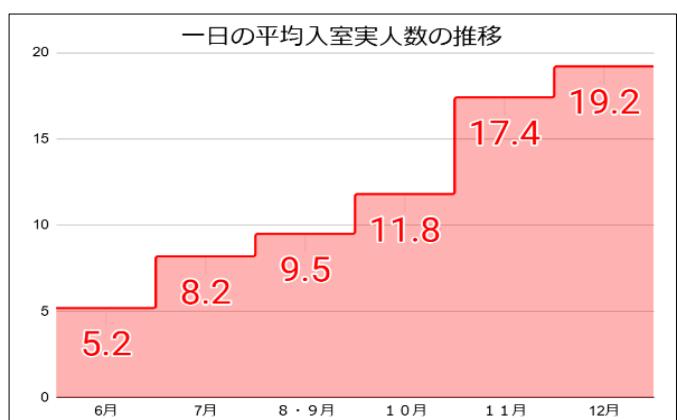


図16 平均入室実人数の推移

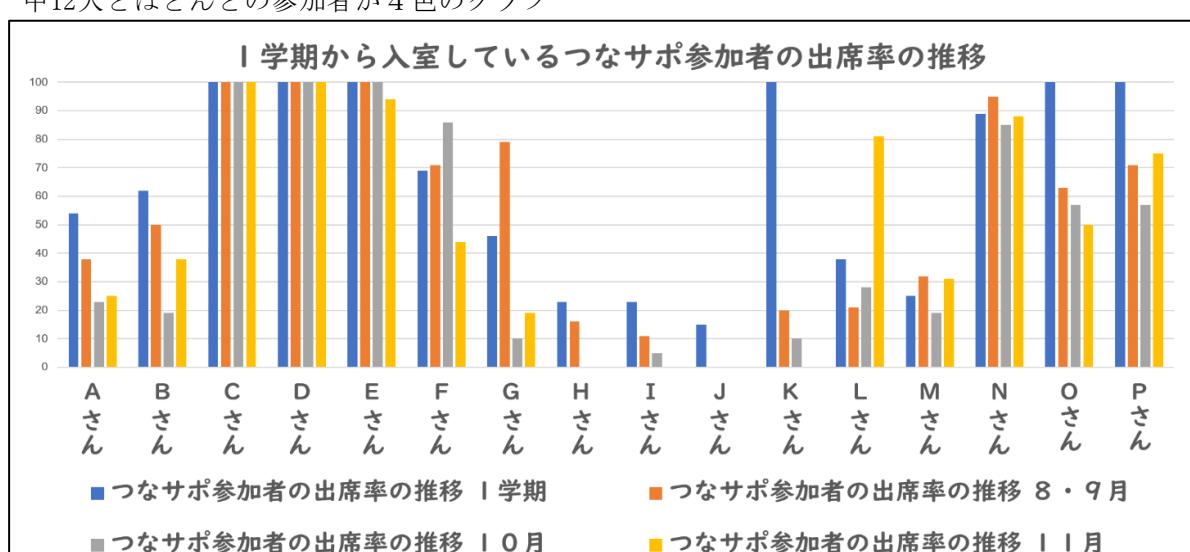


図17 1学期から入室している「つなサポ」参加者の出席率の推移

が揃っていることが分かる。これは、多くの児童生徒が1学期から11月まで毎月継続して入室できているということを示している。その中には、月の出席率が100%に達している児童生徒も数名いることが分かる。半面、出席率が低く、途中から参加がなくなった児童生徒もいるということが分かる。

これらの3つのグラフを通して、「登録者数の増加に伴い、入室者数が増えている」という結果の背景には、「参加児童生徒の多くが何か月も継続して入室できている」という事実があるということが分かった。登録者の半分以上も入室できていないという現状ではあるが、「つなサポ」に参加しているのは、全員が様々な理由で学校を長期欠席している状態の児童生徒たちである。そのような状態の児童生徒たちが、「つなサポ」を継続できているということは、「多くの児童生徒たちにとって、『つなサポ』が居場所の一つになっている」と言える。

また「途中から全く参加しなくなった児童生徒もいる」という事実から、「つなサポ」で行ってきた様々なサポートが適さなかった児童生徒もいると言える。しかし、そういった児童生徒たちの中には、学校に復帰した者や新たにフリースクールに通い始めた者など、安心できる自分の居場所を見つけられた者もいる。つまり、「つなサポ」で行ってきたサポートをきっかけに新たな一步を踏み出した児童生徒たちもいると言える。

② 児童生徒の言動の変容から読み取れること

以上のような実践を行ったことで、入室当初コミュニケーションに課題や不安を抱えた状態で「つなサポ」に参加してきた児童生徒たちが、「つなサポ」の中では、他者との関わりを求めるなり、楽しんだりするようになり、自発的に他者と関わろうとする児童生徒たちの姿も見られるようになった。そのような姿の集大成の一つとして、イベントタイムの活動の中で多くの児童生徒が自分の好きなものや楽しいことなど

自分のことに関するクイズを○×形式で出題することができた（図18）。このような児童生徒の姿の変容には以下の四つの具体的な取組を繰り返したことによる効果があったと考えられる。

まず一つ目として、スタッフによる自己開示を行った。スタートタイム時など、スタッフが好きなものなどをクイズ形式で出題し、紹介した。スタッフが自己開示を行うことで距離が縮まり、児童生徒に安心感を与えることができた。

二つ目として、児童生徒たちが二択で好きなものを選択する機会を設けた。スタートタイムやイベントタイムで、食べ物や日常生活のことなどについて「どっちが好き？」という二択で質問した。ここでは、児童生徒が自分で選択するという経験を重ねることができた。

三つ目として、児童生徒たちの興味関心を掘り下げるための質問を行った。好きな曲や好きなキャラクターなど、児童生徒の興味関心により迫るための質問をすることで、スタッフだけでなく、他の参加者もその児童生徒のことを理解することができ、時には、共通の趣味を見つけることもできた。

四つ目として、児童生徒の興味関心を元に、スタッフがクイズを作成し、参加している児童生徒に答えてもらう機会を設けた（図19）。自分の好きなことに関するクイズが出題されるやいなや、回答者の位置に進んで立つ様子が見られ、クイズの正解を発表する時もジェスチャーなどから、活動を楽しんでいる様子が伝わってきた。

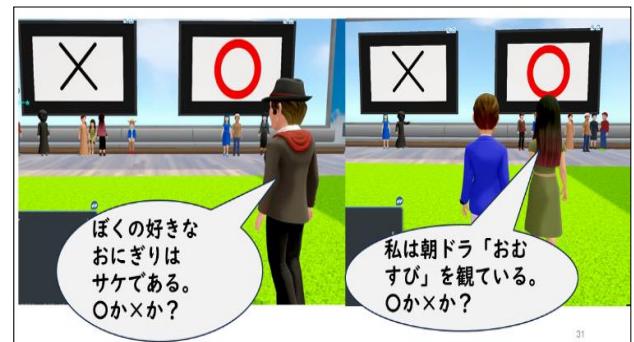


図18 児童生徒が自分のことをクイズにする活動

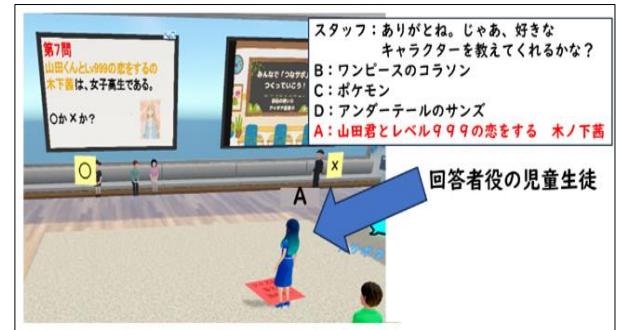


図19 自分の好きなことに関するクイズ

上記の四つの取組を行うことで、入室当初は「コミュニケーションが苦手」と記述した児童生徒が、コミュニケーションに対する苦手意識が軽減されただけでなく、コミュニケーションを楽しめるまでに変容したこと、「ありのままの自分を出せるようになった」と言える。

③ 児童生徒と保護者へのアンケートより

まず、児童生徒たちへ「『つなサポ』の中で楽しく感じるものは?」という質問をした。すると、「イベントタイム」が76.9%、ついで「スタートタイム」が69.2%、さらに「ジェスチャー」が61.5%とコミュニケーションに関わる内容が全体のベスト3という結果になった(図20)。

児童生徒たちの感想の中には、「みんなと話す場があるのが嬉しい」「ジェスチャーなどで自分の気持ちを楽に伝えられるのがいい」「スタッフや仲間たちとの関わりに感動」など、児童生徒がコミュニケーションサポートによる変容を実感していることが分かるような内容の回答が多かった。

保護者の感想の中には、「前より会話が増えて明るく過ごせる」「褒めてくれたり、反応したりしてくれるで、子供の自信になっている」といった子供の成長が見られる内容がたくさんあった。そして、「『つなサポ』がわが子にとって家庭以外で1番の居場所」という声もあり、まさに「居場所づくり」としての成果であると感じることができた。

Q.つなサポの中で、あなたが楽しく感じるものを全て選んでください。

13件の回答

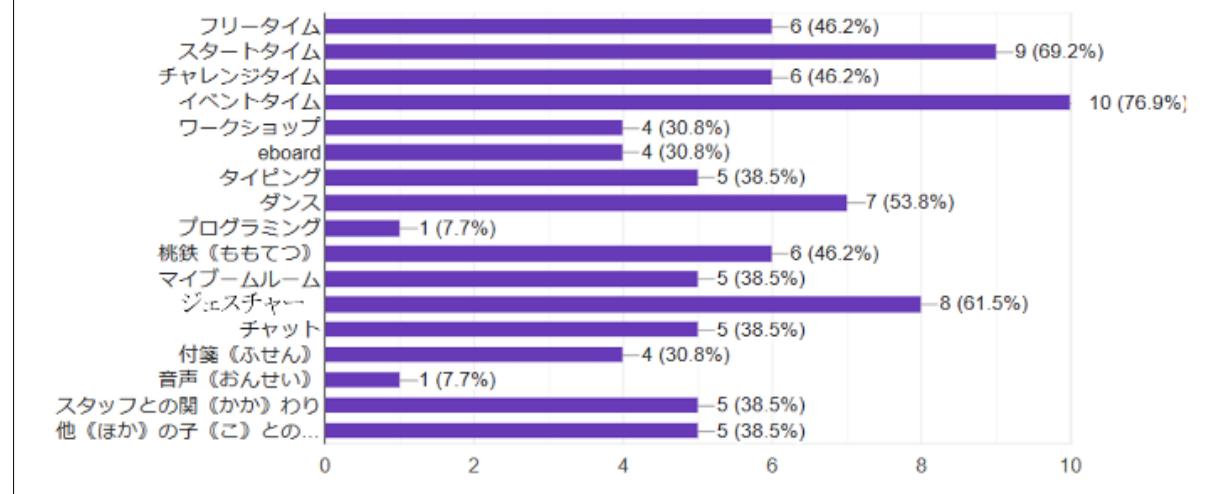


図20 アンケート結果

(4) 実践を通して分かったこと

① 成果

- 入室前情報を基に、児童生徒のよさや課題を詳細に把握できたことで、コミュニケーションに関する支援の充実につながった。
- 「もっと人と関わりたい」という児童生徒の思いに寄り添い、支援を継続的に行ったことで、アバター同士のコミュニケーションを楽しみにしたり、進んで交流したりする姿が見られた。

② 課題

- 児童生徒の思いに寄り添う理解をするために、前年度以前の情報や中学生では小学校からの情報も含めて、入室前情報として児童生徒理解を行う必要がある。
- 自分の思いや行動の表出が少ない児童生徒については、「つなサポ」内のエビデンスに基づいて共感的に児童生徒を理解することが難しい。そこで、児童生徒が抱えているコミュニケーション以外の課題や悩みも引き出す工夫が求められる。

2 「多面的・多角的な児童生徒理解」と情報共有に基づく支援の在り方について

(1) 基本的な考え方

① 「多面的・多角的な児童生徒理解」とは

児童生徒は、学校や家庭、関係機関等、それぞれの場所で異なる姿を見せることがある。それぞれの場所で、児童生徒のことをよりよく理解しようと努めているが、他の場所における姿は分からぬことが多いため、その場所で見られる姿からの一面的な理解になりがちである。しかし、それぞれの場所で見られる姿を学校や関係機関が情報共有することで、児童生徒の姿を多面的な視点で捉えることができるようになる。また、学校や関係機関では、様々な立場の人が児童生徒と関わっており、その専門性を活かして支援した結果を情報共有することで、多角的な視点も加えることができる(図21)。

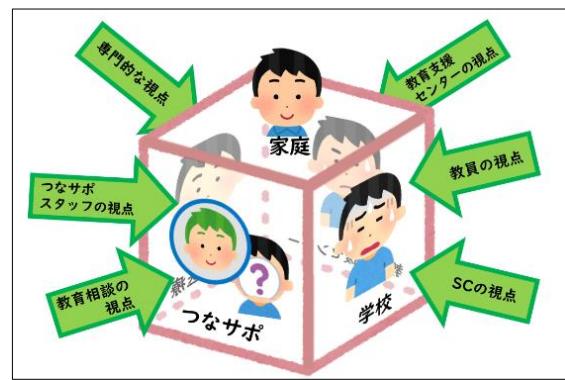


図21 多面的・多角的な児童生徒理解

本研究における「多面的・多角的な児童生徒理解」とは、学校や関係機関が情報共有をすることにより、児童生徒の姿を様々な面や複数の視点から、総合的に把握すること、そして、児童生徒の行動や内面への理解を広げたり深めたりすることだと捉える。

② 「つなサポにおける情報共有」とは

「つなサポ」では、入室している児童生徒を多面的・多角的に理解したり、一人一人に合わせた支援をしたりするために、児童生徒の在籍校、保護者、教育支援センター、フリースクールといった関係機関、医療機関と連携を行う。実際に連携に関わるのは、「つなサポ」スタッフ、児童生徒の在籍校においては管理職・担任・養護教諭等、家庭においては保護者、教育支援センターやフリースクールにおいてはその職員、医療機関においては、医師や臨床心理士等である。

本研究における「つなサポにおける情報共有」とは、学校や家庭、関係機関において児童生徒と関わりのある者同士が、それぞれの場所における児童生徒の状況や様子、支援方法について具体的な内容を互いに情報提供し、共有することだと捉える(図22)。

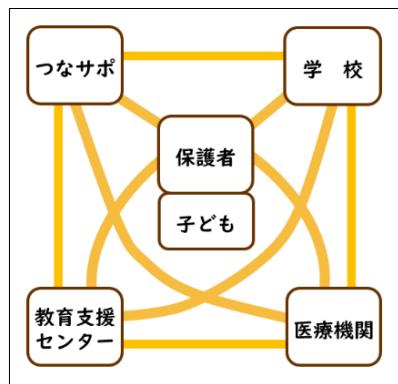


図22 情報共有のイメージ

③ 「情報共有に基づく支援」とは

学校や家庭、関係機関が情報共有を行うことにより、多面的・多角的な児童生徒理解ができるようになる。それを基に、学校や関係機関が、ケース会議を開いたり児童生徒の支援について改めて考えたりすることで、それぞれの場所における支援方針が定まる。また、それぞれの場所がその強みを活かした支援を行うこともでき、様々なアプローチで、より本人に適した支援の充実を図ることができる。その結果、児童生徒一人一人が本来もっている自分らしさを表出できるようになっていく。さらに、支援後の様子や支援内容について、再度情報共有を行うことで、さらに支援が充実する。このサイクルを繰り返すことで、児童生徒の変容につながっていくと考える(図23)。



図23 情報共有に基づく支援

本研究における「情報共有に基づく支援」とは、学校や家庭、関係機関の間で行う情報共有を基にし

て、それぞれの場所が支援方針を立て、一人一人に合わせた支援を行うことだと捉える。

(2) 実践の概要

① 情報共有の時期と内容

「つなサポ」では、入室前と入室後に、それぞれの時期で必要とされる事柄について情報共有を行った。

ア 入室前

○入室前会議

入室前に「つなサポ」スタッフが学校を訪問し、学校職員と入室前会議を実施した。入室前会議では、入室後の児童生徒への支援等について必要な情報共有・協議を行った。内容は、登校状況、本人の特性、休み始めるこことなったきっかけ、家庭環境などである。それらの情報を把握することで、児童生徒が実際に「つなサポ」に入室する際に、配慮できるようにした。また、入室前会議に加え、学校側に「個人票」(p. 8図6)を提出してもらうことで、児童生徒を支援する際の参考にした。

○児童生徒本人と保護者との面談

「つなサポ」スタッフが、入室を希望する児童生徒や保護者に「つなサポ」の概要・操作説明を行った。場所は、基本的には学校であるが、児童生徒や保護者の希望により、教育支援センター等の関係機関や、児童生徒の自宅で行うこともあった。児童生徒の意思により本人が面談に同席しない場合は、保護者にのみ説明を行った。その後、児童生徒本人が「自己紹介カード」(p. 8図7)を記入し、学校を通して提出した。「自己紹介カード」には、本人の興味のあることや好きなこと等が記入する欄があり、入室後にスタッフがコミュニケーションをとる際のきっかけとした。

イ 入室後

○月末の報告

「つなサポ」と学校がクラウド上に共有しているフォルダに、その月の「つなサポ」入室日数や行動の様子を入力したデータを入れ、学校側へ情報提供を行った(図24・25)。さらに、電話にてそれらの情報を伝えるとともに、学校からも児童生徒について最新の情報を聞き出すことで、情報共有を図った。

整理番号		学年		氏名	
活動時間合計		40時間 13分	平均活動時間(1回あたり)		3時間 27分
回数	日	曜日	入室時刻	退室時刻	活動時間 (昼食時間も含む)
1	2	月	10:23	13:47	3時間 24分
2	3	火	10:04	11:56	1時間 52分
3	4	水	10:04	15:04	5時間 00分
4	5	木	10:02	15:00	4時間 58分
5	10	火	10:00	14:26	4時間 26分
6	12	木	10:03	14:08	4時間 05分
7	17	火	10:15	12:21	2時間 06分
8	18	水	10:03	11:34	1時間 31分
9	25	水	10:00	14:54	4時間 54分
10	26	木	13:00	14:59	1時間 59分
11	27	金	10:01	14:59	4時間 58分

この月の所感
エモート機能や音声機能を使って、他の児童・生徒と積極的に関わる姿が見られました。フリータイムやチャレンジタイムでは、eboardを利用して小学校一年生の算数や理科の単元を中心に学習することができます。イベントタイムの「みんなで協力して付箋タワーを作ろう！」では、他の児童・生徒と協力して5階建ての付箋タワーを作ることができました。

図24 入室履歴・活動の様子の報告

○学期末の報告

家庭に向けて「つなサポ」で見られたその学期の顕著な姿について保護者のメールアドレス宛にデータで報告をした。その際、保護者が感想等を記入できるアンケートを添付して、家庭からの情報を得られるようにした。

別紙 eboardによる学習等報告書(月)					
	立	学校	さん		
No.	最終回答日時	単元名	教科名	授業動画視聴	ドリル回答数
1	2024年月日11:31		算数	授業動画視聴(4/8本)	ドリル回答数(42/25問)
2	2024年月日13:33		算数	授業動画視聴(1/7本)	ドリル回答数(0/20問)
3	2024年月日13:50		算数	授業動画視聴(1/8本)	ドリル回答数(1/25問)
4	2024年月日14:00		算数	授業動画視聴(1/8本)	ドリル回答数(1/30問)
5	2024年月日9:47		算数	授業動画視聴(5/5本)	ドリル回答数(30/20問)
6	2024年月日9:59		算数	授業動画視聴(4/5本)	ドリル回答数(32/14問)
7	2024年月日11:10		算数	授業動画視聴(0/7本)	ドリル回答数(0/20問)
8	2024年月日13:48		算数	授業動画視聴(6/6本)	ドリル回答数(68/20問)
9	2024年月日13:31		算数	授業動画視聴(7/7本)	ドリル回答数(45/25問)
10	2024年月日10:32		算数	授業動画視聴(4/4本)	ドリル回答数(24/18問)
11	2024年月日11:22		算数	授業動画視聴(5/7本)	ドリル回答数(26/20問)

図25 学習履歴の報告

○ケース会議

「つなサポ」で、児童生徒に心配な様子や気になる姿が見られた際に、まず「つなサポ」スタッフでケース会議を行った。そして、学校や関係機関も含めたケース会議が必要だと判断した場合には、実際に「つなサポ」スタッフが学校や関係機関を訪問したり、オンラインで場を設定したりしてケース会議を実施した。そこで「つなサポ」における児童生徒の様子を伝えるとともに、学校や関係機関がもつ情報を提供してもらい、情報共有を行った。さらに、それぞれの場所で支援できることを検討し、支援の充実を図った。

○連絡

学校への月末の報告以外に、児童生徒に変化が見られたときや、共有すべき情報があった時に、学校や関係機関と隨時連絡を取った。特に、2週間連続で入室がない児童生徒に対しては、学校と情報共有を行い、支援方針を確認した。

○相談

学校や関係機関、家庭から相談を受けることがあった。内容は「子供がつなサポでどのように活動をしているのか知りたい」といったことや、児童生徒や保護者が現在困っていることなど、多種多様であった。その情報を基に児童生徒のことをより深く理解したり、支援方針を立てる際には参考にしたりすることができた。

② 情報共有の手段

学校や関係機関、保護者と情報共有をする際に、最も頻度が高かった手段は、迅速かつ双方向のやりとりが可能な電話であった。ただし、学校と情報共有を行う最初の機会である「入室前会議」では、「つなサポ」スタッフが実際に学校を訪問し対面して協議することで、信頼関係の構築を図ったり円滑なコミュニケーションを行ったりすることを大切にしてきた。入室後、必要に応じて行うケース会議は、訪問の他、効率性を活かしてオンラインで行うこともあった。また「つなサポ」と学校の間で、クラウド上でデータを共有することで、「入室日数」や「活動の様子」などの記録はデータでも共有をしてきた。「つなサポ」と関係機関や保護者が行う情報共有には、様々な手段があるが、状況に応じて最も適切かつ有効だと思われる手段を適宜使い分けて活用してきた。

③ 情報共有の実績

今年度「つなサポ」では、児童生徒に関わる次のような機関と情報共有を行った。児童生徒の保護者、在籍する学校、関係機関（教育支援センター・フリースクール）、臨床心理士、SSWである。その回数は、約320回（12月末時点 72人登録）であった。

(3) 情報共有に基づく実践

① コミュニケーションサポートによって他の児童生徒と関わりがもてるようになった事例（図26）

- 対象児童：小学校高学年Aさん
- 連携先：在籍小学校、家庭
- 情報共有の主な手段：学校訪問、電話連絡
- 経過

Aさんの様子

入室当初から、スタートタイムやイベント活動に必ず参加していた。スタッフの声掛けに対し、ジェスチャーで反応したり、チャットで返事をしたりすることができた。しかし、他の児童生徒に関わる様子はほとんど見られなかった。

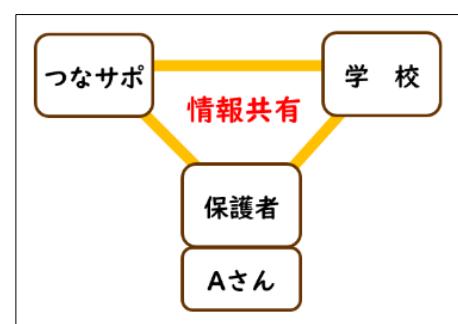


図26 連携図 Aさんのケース

入室して2か月が経った頃、他の児童生徒に「手を振る・おじぎをする」ジェスチャーで働きかける姿が見られるようになった。また、入室すると毎回途中で退室し、イベントタイムの前に再入室するようになった。あるイベントタイムの時、他の児童生徒とコミュニケーションを取る必要性が生じたが、ジェスチャーだけでは意思疎通が難しく、本人が困ってしまったのではないかと推察される出来事があった。

「つなサポ」・学校・家庭の情報共有

上記のような出来事があった数日後、「アバターだとコミュニケーションがうまく取れなくて、本人がもどかしく感じているようだ」と母親から「つなサポ」に電話相談があった。

そこで、「つなサポ」スタッフがAさんの在籍校を訪問し、ケース会議を実施した。「つなサポ」における様子を共有するとともに、学校からは、「『つなサポ』に入室するようになってから、学校のリモート授業を受けられるようになった。どちらにも参加したいという気持ちがあり、同時間帯にパソコンで『つなサポ』、タブレット端末でリモート授業を使い分けて参加している。夏休み中も担任と日記のやり取りをして連絡を取り合っていた。学校外では友達と遊ぶこともできた。」という情報を得ることができた。

情報共有を基にした「つなサポ」の支援方針とコミュニケーションサポートの実施

「つなサポ」スタッフでケース会議を開いてアセスメントを行い、次のような二つの支援方針を立てた。

- ・Aさんは、他の児童生徒とジェスチャー以外の手段で更に関わりたいと考えているため、そのきっかけをスタッフが作っていくようにする（コミュニケーションサポート）。
- ・「つなサポ」の活動に前向きであるとともに、学校とも良好な関係を築けているため、途中退室に関しては、Aさんの意思を尊重し見守る支援に徹する。

これらの支援方針に基づき、次のようなコミュニケーションサポートを行った。

【個と個をつなぐコミュニケーションサポート】

「つなサポ」の廊下で、AさんがBさんに向けてジェスチャーでお辞儀していた。それをスタッフが見掛け、支援方針に基づき「少し話をしませんか」と二人に声を掛け、個室に入るよう促した。周囲を気にすることなくコミュニケーションができる場を設定したことで、スタッフを介しながらも、AさんはBさんとチャットで会話をすることができた（図27・28）。



図27 個室で会話（チャット）をする様子

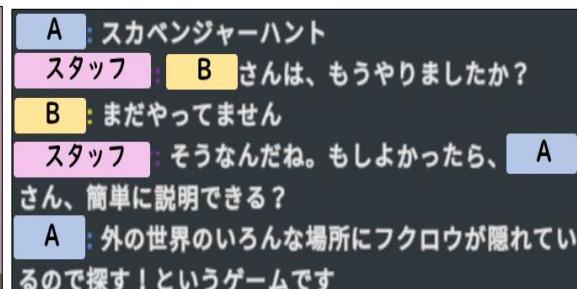


図28 実際のチャットの内容

【小集団の会話につなげるコミュニケーションサポート】

スタッフとAさんが廊下で挨拶や会話をしていると、他の児童生徒が気になって寄って来ることがあった。スタッフがAさんや他の児童生徒にも「よかつたら、みんなでおしゃべり会をしませんか」と声をかけたところ、複数人でチャットを用いて会話をすることにつながった（図29）。

【コミュニケーションサポート後のAさんの様子】

「つなサポ」では、上記のコミュニケーションサポートを繰り返し行った。その後、Aさんを含む児童生徒数人が、自然とプライベートエリア（範囲を限定して会話ができる場所）に集まり、ダンスをしたり、チャットで会話をしたりする様



図29 おしゃべり会の様子

子が見られるようになった（図30）。

また、Aさんは、コミュニケーション以外でも積極的な面が目立つようになり、主体的にイベント準備や活動に取り組む姿が見られるようになった。

その後の情報共有

母親から「つなサポ」に直接電話があり、「『つなサポ』をとても楽しんでいる。入室するようになってから、前向きに過ごせるようになり、本人の生活が改善されている。放課後登校もできた。」という喜びの声があった。一方で「体調が優れず、健康面での不安もあるので、進学先でも『つなサポ』を利用したい。」という相談があった。

学校に「月末の報告」で「つなサポ」における活動の様子を伝えた際、学校からも「放課後登校ができるようになった」との情報を得ることができた。「つなサポ」での意欲的な活動ぶりや成長を踏まえ、今後も学校と「つなサポ」で連携して支援していくことを確認した。

Aさんのその後の様子

「つなサポ」において、自分の思いや考えをスタッフや他の児童生徒に伝えられるようになり、毎日のように他の児童生徒とチャットでの会話を楽しむ様子が見られている。また、スタッフが提案したイベントに前向きに取り組むだけでなく、「○○をやってみたい」といったように自分からアイデアを出して活動を提案するなど、積極性が更に顕著になっている。学校においても「放課後登校が週一回の頻度でできるようになった。進学先の説明会に参加できた」といった様子が見られ、さらなる変容の様子を学校と「つなサポ」で情報共有することができた。

○Aさんの事例のまとめ

学校や保護者と情報共有を行ったことにより、Aさんのニーズに合わせたコミュニケーションサポートを行うことができた。「情報共有」と「支援」というサイクルを繰り返すことで、Aさんは、「つなサポ」においても学校においても大きな変容が見られた（図31）。

② 「つなサポ」においてコミュニケーションサポートができるることを目指した事例（図32）

○対象児童：小学校高学年Cさん

（教育支援センターに通所し、そのパソコンから
「つなサポ」に入室）

○連携先：在籍小学校、教育支援センター

○情報共有の主な手段：学校・教育支援センター訪問、
電話連絡

○経過

Cさんの様子

入室当初、スタッフや他の児童生徒に進んで音声で話し掛けたり、活動に積極的に取り組んだりする姿が見られた。アバターの動きや「つなサポ」の機能を積極的に試して楽しんだり他の人に紹介したりしていた。気の合う友達もでき、同



図30 児童生徒同士の自発的な集まり

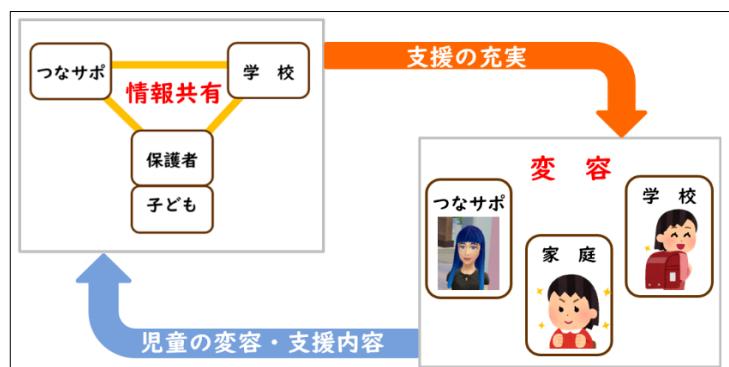


図31 情報共有と支援のサイクル Aさんのケース

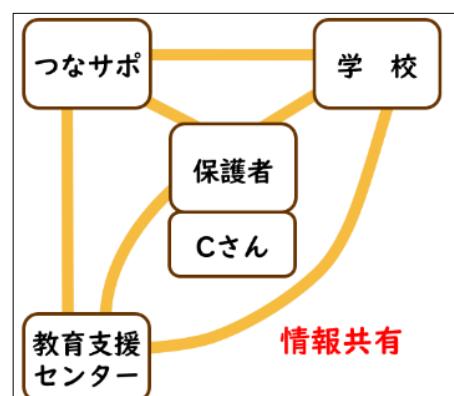


図32 連携図 Cさんのケース

じ時間帯に入室した時は、音声で会話をしながら遊んでいた。また、「つなサポ」に入室する前は、教育支援センターを休むことも多かったが、「つなサポ」に入室するために、教育支援センターに毎日通うことができるようになった。

しかし、入室2か月が経った頃から、スタッフや他の児童生徒に話しかける様子が見られなくなつた。入室するとダンスルームに入ってアバターを躍らせるだけで、「つなサポ」スタッフが話し掛けても反応しないことが増えた。そのような中、久々にイベント活動に参加した際、Cさんが一人の参加者を困らせる行動をしてしまい、トラブルになるということがあった。スタッフがそれぞれに話を聞いたところ、Cさんが自分の非を認め、相手にチャットで謝罪することで解決に至った。

「つなサポ」・学校・教育支援センターの情報共有

学校への「月末の報告」の際に、「つなサポ」における様子や他の児童生徒とトラブルが起きてしまった件を情報共有する。学校からも「行事には参加することができたが、友達とトラブルになってしまった」という情報を得ることができた。

また、Cさんが毎日通所している教育支援センターに「つなサポ」スタッフが訪問して、Cさんの様子を観察するとともに、職員とケース会議を実施した。その結果、Cさんは「『つなサポ』を利用するために用意された部屋に一人でいる時間が長いこと」「『つなサポ』に入室するとダンスルームでアバターを躍らせたまま、別のタブレット端末を用いてプログラミングを楽しんでいること」が分かつた。また、職員の話から「自分の思いを優先させるため、友達とトラブルになりやすいが、現在はCさんに対して周囲の児童生徒の理解があるため、トラブルを回避できていること」も分かつた。

情報共有を基にした「つなサポ」の支援方針とコミュニケーションサポートの実施

「つなサポ」スタッフ内でケース会議を開いて、次のようなアセスメントを行い、二つの支援方針を立てた。

- ・Cさんは、人との関わり方に困難さを抱えている。教育支援センターで人とあまり関わらずに活動している限り、コミュニケーション力の育成は難しい。そのため「つなサポ」において、他者と交流する中で、コミュニケーション力が身に付けられるよう、イベント活動への参加を促していく。その際、Cさんが人と適切に関わることができるようコミュニケーションサポートをする。
- ・Cさんの夢中になっているプログラミングを活かすことで、他の児童生徒と交流できるようにする。

これらの支援方針に基づき、次のようなコミュニケーションサポートを実施した

【他者と交流する機会を増やすためのコミュニケーションサポート】

ダンスルームに籠っているCさんに対し、毎日スタッフが声をかけて、イベント活動への参加を促すようにした。参加した時は、Cさんが他の児童生徒と適切に関わるように様子を見たり、声をかけたりした。

【本人の興味を活かして他者と交流するためのコミュニケーションサポート】

Cさんが作成しているプログラミングについて、「作っているものを保存する方法が分からない」とのことだったため、スタッフが保存の仕方を知っているので教えられること、完成したら「つなサポ」内で紹介できることを伝えた。本人から「はい」と返事は返ってきたが、スタッフが声をかけても紹介したいという様子が感じられなかつた。

【コミュニケーションサポート後のCさんの様子】

「つなサポ」では、相変わらずダンスルームで、アバターにダンスを躍らせていることが多かつた。スタッフが「イベントに参加しませんか」と声をかけると参加する時もあれば、参加しない時もあつた。参加した時は、スタッフがCさんの様子を気にかけてコミュニケーションサポートを行っているため、他の児童生徒とのトラブルは起きていない。プログラミングの紹介については、スタッフが声をかけてもあまり乗り気ではない様子であった。

【その後の情報共有】

学校や教育支援センターと情報共有を行い、「つなサポ」における様子を伝えるとともに、それぞ

れの場所のCさんの様子についても情報を得たところ、どちらもその時点で変化は見られないとのことだった。

そのような情報を基に「つなサポ」では支援について再度見直し、Cさんに適した支援の在り方について検討を続けてきた。

○Cさんの事例のまとめ

学校や教育支援センターと情報共有を行い、それぞれの場所がCさんを支援してきたが、大きな変容は見られなかつた。しかし「つなサポ」や学校、教育支援センターが情報共有を行ったことにより、Cさんの課題を互いに共有でき、それぞれの場所の支援が明確になったことは有意義であった。Cさんに変化がないことも含めて、繰り返し情報共有を行うことで、支援の見直しにもつながった。

それぞれの場所が試行錯誤しながら支援方法を探り、協力してCさんを支援に当たることができたことは、支援を補完し合ったり、支援の可能性を広げたりすることにつながった(図33)。

(4) 実践を通して分かったこと

① 成果

- 学校や関係機関が情報共有を行うことにより、多面的・多角的な児童生徒理解ができるようになった。それにより、それぞれの場所において強みを活かした支援方針が定まり、本人に適した支援を充実させることができた。
- 学校や関係機関が児童生徒の課題を共有し、一つのチームとして支援に当たることができた。同時に、情報共有により児童生徒や保護者のニーズを踏まえることができたり、情報共有を繰り返すことで情報が更新されたりして、より本人に適した支援の充実を図ることができた。

② 課題

- 「つなサポ」からの発信で情報共有を行うことが多かったが、一人一人に合わせた支援を行うためには、学校や関係機関が随時情報を更新したり提供したりすることが重要である。今後、双方向から容易に発信や共有をしやすい環境を整えていく必要がある。

V まとめ

今年度、「つなサポ」において、人と関わりながら自分なりの方法で思いを表出することができる児童生徒の育成に向け、児童生徒のコミュニケーションに焦点を当てた支援や指導を行った。学校等では、教室内外での児童生徒の言動といった言語的コミュニケーションだけでなく、表情や仕草などの非言語的コミュニケーションも大切にしながら、児童生徒の様子を丁寧に観察し、一人一人に応じた指導や支援を行っている。一方で、「つなサポ」では、児童生徒がアバターを通して活動に参加しており、音声やチャットでの言語的コミュニケーション、ジェスチャーによる非言語的コミュニケーションでの関わりとなる。そのため、児童生徒理解を行うための情報が十分ではないと考えられる。そこで、「つなサポ」に入室前や入室中の情報に基づいた支援と、児童生徒にそれぞれの立場で日々関わっている関係機関がもつ情報を共有し合い、継続的に連携を図る中で、児童生徒一人一人に最適な支援を行った。

入室前の情報による児童生徒の興味・関心に応じた支援を考えたり、入室後のやりとりや活動する姿等の情報を手がかりとして、支援の改善を図ったりした。こうした情報を蓄積し、関連付けることで、他者と関わりたいという児童生徒の思いに基づいた半歩先の手立てとその支援を見出すことができた。継続して、他者との関わりを深める機会を設けることで、徐々に児童生徒が自ら他者と関わろうとする姿を引き出すこと

ができた。

学校や教育支援センター、フリースクール等の関係機関が、日々児童生徒と関わる中で見られた様子や取り組んでいる支援等をケース会議の場で共有した。児童生徒に対して、それぞれの立場で児童生徒の思いを大切にした支援を行っていることが分かった。関係機関が支援方法や児童生徒の姿等を共有することで、児童生徒の実態に合わせた支援が明確になった。また、それぞれの場では見られなかつた児童生徒の姿を共有する機会となり、児童生徒の言動の背景にある思い等が明確になり、児童生徒理解を深め、支援を一層充実させることができた。

このように、児童生徒のコミュニケーションに焦点を当て、様々な情報に基づいて児童生徒理解を行うことで、一人一人に根拠のある支援を行うことができた。児童生徒への支援が充実することで、児童生徒は自分なりの方法で他者と関わろうとする姿が徐々に増え、スタッフが間に入らなくても、フリータイムには児童生徒同士で集まり、会話を楽しむ姿が見られるようになった。コミュニケーションに苦手意識のあった児童生徒も、自分なりの方法で自分の思いを他者へ伝えることを通して、認め合ったり、同じ思いをもつ児童生徒と共に感し合ったりすることができた。そのような経験を重ねることで、自己の思いを表出することに自信をもち、他者と積極的に関わろうとする姿へとつながった。そのような姿が見られるようになつた背景には、児童生徒が「『つなサポ』であれば思いを表出しても大丈夫である」と認識していること、「つなサポ」を安全・安心な場として捉え、児童生徒にとって居場所の一つとなつていると考えられる。

今後も、関係機関と情報共有を図りながら、児童生徒一人一人の思いを大切にし、社会的自立に向けた支援を続けていきたい。

<引用文献>

- ・文部科学省（2024）「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」
- ・文部科学省（2022）「生徒指導提要」
- ・群馬県教育委員会（2024）「第4期群馬県教育振興基本計画 群馬県教育ビジョン」
- ・文部科学省（2023）「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）」
- ・愛媛県総合教育センター（2024）「教育研究紀要第90集（令和5年度） 4 不登校生徒の支援に関する研究—メタバースを活用した実践を通して—」

<参考文献>

- ・文部科学省（2019）「不登校児童生徒への支援の在り方について」令和元年10月25日
- ・文部科学省（2022）「不登校に関する調査研究協力者会議報告書～今後の不登校児童生徒への学習機会と支援の在り方について～」
- ・文部科学省（2016）「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保等に関する法律」
- ・総務省（2023）「不登校・ひきこもりのこども支援に関するアンケート調査の結果」
- ・今村久美（2023）「NPOカタリバがみんなと作った 不登校－親子のための教科書」ダイヤモンド社
- ・諸星祥彦（2022）「不登校体験の本質と予防・対応 学校に行けない『からだ』」図書文化社
- ・宮内裕史（2023）「ASEBAを活用した不登校対応の校内ケース会議－中学校教師の意識変容に着目して－」
- ・松本武洋（2023）「義務教育におけるWeb会議システム、メタバースを活用した不登校児童生徒支援の現在地－熊本市、埼玉県戸田市、東京都/新宿区を事例として－」
- ・池田利基・金子楓（2023）「オンライン不登校支援事業が子どもの学校復帰に及ぼす効果に関する研究」
- ・蓮浦頤達（2023）「不登校等児童生徒への支援の充実に向けて」子どものこころと脳の発達 Vol. 14

No. 1

担当指導主事 山田 雅之 高橋 正明 主任 岩倉 侑祐
研究員 天川 有珠佳 千木良 昌計